

読売

教育ネットワーク

社会はまるごと学校——
すべての大人が先生です



創刊インタビュー 「顧問に聞く:ネットワークに期待するもの」

清家篤氏、乙武洋匡氏、あさのあつこ氏

どんな組織? コンセプトと4つの活動

学校発 「2つのチャレンジ」立命館小学校、市川中学校・高等学校

創設記念イベント／参加募集

2014.7
Vol.0



乙武洋匡氏

(おとたけ・ひろただ) 1976年生まれ。早稲田大学在学中に著した「五体不満足」がベストセラーとして活躍。公立小から東京教育委員。都内で保育園の運営にも携わる。

外からの応援 大歓迎

教育現場は、多くのものを背負われ、コップの水があふれかけているような状況です。

僕は、2007年から3年間、東京都杉並区の小学校で3、4年生の担任を務めました。昨年からは東京都の教育委員を務めています。この10年を振り返ると、環境教育、キャリア教育、英語教育、IT教育など、課題が次々と現場に降ってきました。だからといって、現場には全部こなせるほどの予算や人員の補充はありません。僕は地域によるバックアップが必要だと、ずっと発信してきたので、読売新聞が、大学や企業・団体、教育現場をネットワークで結ぶという試み聞き、心強く、すごくありがたいなと感じました。学外の

力を借りることで、教育現場のキャパシティを広げることが、今、必要になっていきます。

例えば、中学の体育でダンスが必修になりました。50代のベテラン教諭が、今からヒップホップを覚えて教えるのは、本当に大変です。ダンスの指導者と学校がネットワークでつながれば、先生の負担は軽減され、子供たちも経験豊富な指導者から学ぶことが出来るわけです。

また、画一的な学習環境ではうまく学べない少数派の子供もいます。例えば、文字を読んだり、聞いたりして理解するのが苦手な学習障害だったり、外国籍や帰国子女で日本語が得意でなかったりする子供たち。そこに、IT企業が読み上げ機能のあるタブレット端末を貸し出したリ、語学が堪能な大学生がボランティアで入ったりする。そういう使い方も出来れば、有り難いですね。

ただ、学外の力を借りることに抵抗を感じる先生もいます。また、教育現場を宣伝などに利用しようと考える人もいます。そこには、信頼関係が欠かせません。学校の外に子供や保護者、地域の人を巻き込む催しや試みの場を設け、先生たちが気軽に参加することがスタートラインだと思えます。そこで互いの信頼を育て、授業にプラスになると先生に実感してもらい、ジワジワ、利用活動を広げていく。速回りに見えてこれが一番効果的だと思います。

子どもたちの学びを企業や団体、大学とともに支援するために、読売新聞社はこの秋、「読売教育ネットワーク」を創設します。ユニークな出前授業や各種プログラム、教育に関する先駆的な試みなどの情報を、会報とウェブサイト、イベントを通じて中小高校と共有するのが目的です。ネットワークの運営については、清家篤氏(日本私立大学団体連合会会長)、乙武洋匡氏(東京都教育委員)、あさのあつこ氏(作家)、新浪剛史氏(ローソン会長)、吉田晋氏(日本私立中学高等学校連合会会長)の5人の顧問から助言を受けます。学校と社会をより緊密につなぐ試みについて、清家、乙武、あさのの3氏に聞きました。

学校と社会つなぐ 未来への懸け橋

日本で教育はいつの時代にももつとも大切なものでした。そしてその重要性は今日ますます大きなものとなっていきます。それは日本がいま、世界に類を見ない高齢化を経験しつつあるからです。

日本ではすでに人口の4分の1が65歳以上の高齢者という世界トップの高齢人口比率となっており、これは20年後には人口の3分の1にまで上昇します。少子化対策は強力に進めなければ

ばなりません。それでも就労人口の減少は避けられません。働く人たちの数が減るので、一人一人の能力をさらに高めなければ、経済活動の水準は維持できませんし、社会保障制度など社会制度を支えることも難しくなるといえることです。

大きな変化の時代に自分の頭でものごとを考えることのできる力、国際化の時代に異なる文化的背景を持った人々と仕事をすることのできる力など、より

高度な仕事能力がますます求められるようになり、そのように求めらるる力や異文化を受容する力の基盤は、大学においてしっかりと学問を修めることで身に付けられます。

変化と国際化の時代 乗り切る力

同時に、企業での能力開発もますます重要になります。その時々で求められる仕事能力は、仕事のする上で必要な技術や市場の構造等によって変化しますから、日進月歩の技術や市場の変化に対応して、仕事能力も向上させねばなりません。従業員を手塩にかけて育てることで、企業は大きな変化と国際化の時代に競争力を維持することが出来るのです。

大学や企業での能力形成



清家篤氏

(せいけ・あつし) 1954年生まれ。慶應義塾大学経済学部卒業。専門は労働経済学。商学部長などを歴任。09年から慶應義塾長。政府の社会保障制度改革国民会議会長として、社会保障制度の持続可能性を高める方向性を打ち出した。

小学生、中学生、高校生のころから、大学や企業で能力を高めるためにどんな基礎学力が必要なのかを知っておくことが重要です。また将来の自分の姿を想像するためには、大学や企業においてお手本となる人たちに接することも有益でしょう。それによって子どもたちが将来に夢を描くことが、勉強の大きな動機付けにもなると思います。

こうした観点から今秋創設される教育貢献事業「読売教育ネットワーク」に期待しています。全国の小学校、中学校、高校と企業、団体、大学を、会報とウェブサイトをつなぎ、それぞれが展開するユニークな出前授業や教育に関わる先駆的な試み、魅力的なプログラム等を学校と共有する試みです。ネットワークが充実すれば、どの企業や大学が、子どもたちに役立つどのような教育コンテンツを持っているのかが分かります。多様な情報は新聞社の編集力で整理されていますので、学校が上手に活用すれば、子どもたちが実社会に触れる機会が増え、知的好奇心を高め、夢を育む助けになることでしょう。

地方発の元気に期待



あさのあつこ氏

1954年岡山県生まれ。小学校の講師などを経て作家デビュー。10年がかりで完成した「パッテリー」が、野間児童文芸賞などを受賞し、映画化、テレビドラマ化された。「ランナー」[NO.6]など著書多数。岡山県在住。

私は、読売教育ネットワークと子どもたちとの言葉のキャッチボールに大いに期待しています。

「今の生徒たちは言葉の力が衰えてきた」と言われます。私はそう思いませんが、少なくとも私が出会った子どもたちは、自分を表現したいという気持ちにあふれています。特に思春期の生徒たちは、「自分を理解してほしい」「自分が何者なのか自分で理解したい」という思いが強く、生々しい。手段はいろいろありますが、文章は鉛筆と紙があれば書けるので、身近です。私は年に1、2度、高校で文章表現を教えています。物語づくりを通じて、人に興味を持ち、「見て、書く」力をつけるお手伝いをしたいと思ったからです。

日本では書く技術の教育は充実していますが、己の言葉を獲得し、表現するための教育はまだこれからです。理想を言えば少人数授業で、表現する喜びを実感できる時間を早くから設けることが大切だと思います。教育を通して地域活性化の面からもこのネットワークに期待します。

地方の人口流出は、教育も一因かもしれません。全国一律の教育では、地方の若者たちは自分の居場所がわからなくなってしまう。故郷への誇りが薄れ、自信喪失につながります。今は通信手段が発達し、数十年前に比べ、中央と地方の情報格差は縮まったので、遠隔授業や地方からの情報発信に活用できるでしょう。

各企業や大学はその道のエキスパートです。化粧品や薬の製造過程や、自動車メーカーや新聞社の内部など、子どもたちに縁遠かった世界に触れれば、彼らに大きな刺激になります。将来への可能性を広げます。

私は教育の専門家ではないので、少々荷が重い気もしましたが、地方にとつて可能性を広げると信じ、顧問をお受けすることにしました。

このネットワークと子どもたちの双方の情報交換が大切ですね。ちょうどキャッチボールする野球のパッテリーのように。ネットワーク発の情報を子どもたちが受け取り、反応が返ってくる。それを受け止め、考え、いい方向に変わっていく。そんな組織であってほしいですね。

学校・大学・企業をつなぐネットワーク

「読売教育ネットワーク」は、会報、ウェブサイト上で、企業・団体、大学、小中高校間が相互に情報を発信するプラットフォームになります。また、専門家らを招いたシンポジウムや勉強会では、教育界の旬なテーマについて学び、さらに相互の交流をサポートします。

**読売新聞社が
コーディネート**

「教育の読売」の主な取り組み

読売新聞は、子どもたちに役立つ様々な教育プログラムを展開しています。



読売中高生新聞、11月7日に創刊

ティーンの世界にかかわる社会事象から最新の話題まで、ニュースをわかりやすく解説する中学生、高校生向けの新聞。英語の日常会話と長文読解を用意するほか、国語、数学、科学、社会も週替わりで展開し、学力アップにも役立ちます。著名人がティーンの悩みに答えるコーナーも。紙面連動のスマホ用アプリ「Yteen」は、今秋にリリース予定。

高円宮杯全日本 中学校英語弁論大会

60年以上の歴史と伝統を誇る国内最高峰の中学生の英語スピーチコンテストです。

全国小・中学校 作文コンクール

ふだんの生活や学校で体験したことなど、自由なテーマ、分量で書くことができます。

日本学生科学賞

理科教育に基づく中学・高校生の公募コンクールとして1957年に創設され、国内で最も伝統があります。

読売教育賞

1952年の創設以来、優れた業績をあげている教育者を顕彰し、創造性に富む教育環境づくりに貢献しています。

ディベート甲子園

与えられたテーマについて、賛成と反対の立場に分かれ、議論の仕方を学ぶための大会を共催しています。

全国高等学校 ビブリオバトル

良書との出会いだけでなく、プレゼンテーション力が身に付く知的コミュニケーションゲームです。

読売KODOMO新聞

ニュースの内容をわかりやすく伝えるほか、役に立つ特集記事や学習漫画などを掲載しています。

ヨミウリ・ ジュニア・プレス

一般応募で集まった関東近郊の小学5年生から高校生までが、記者となって取材、本紙上に記事を書きます。

ことばの授業

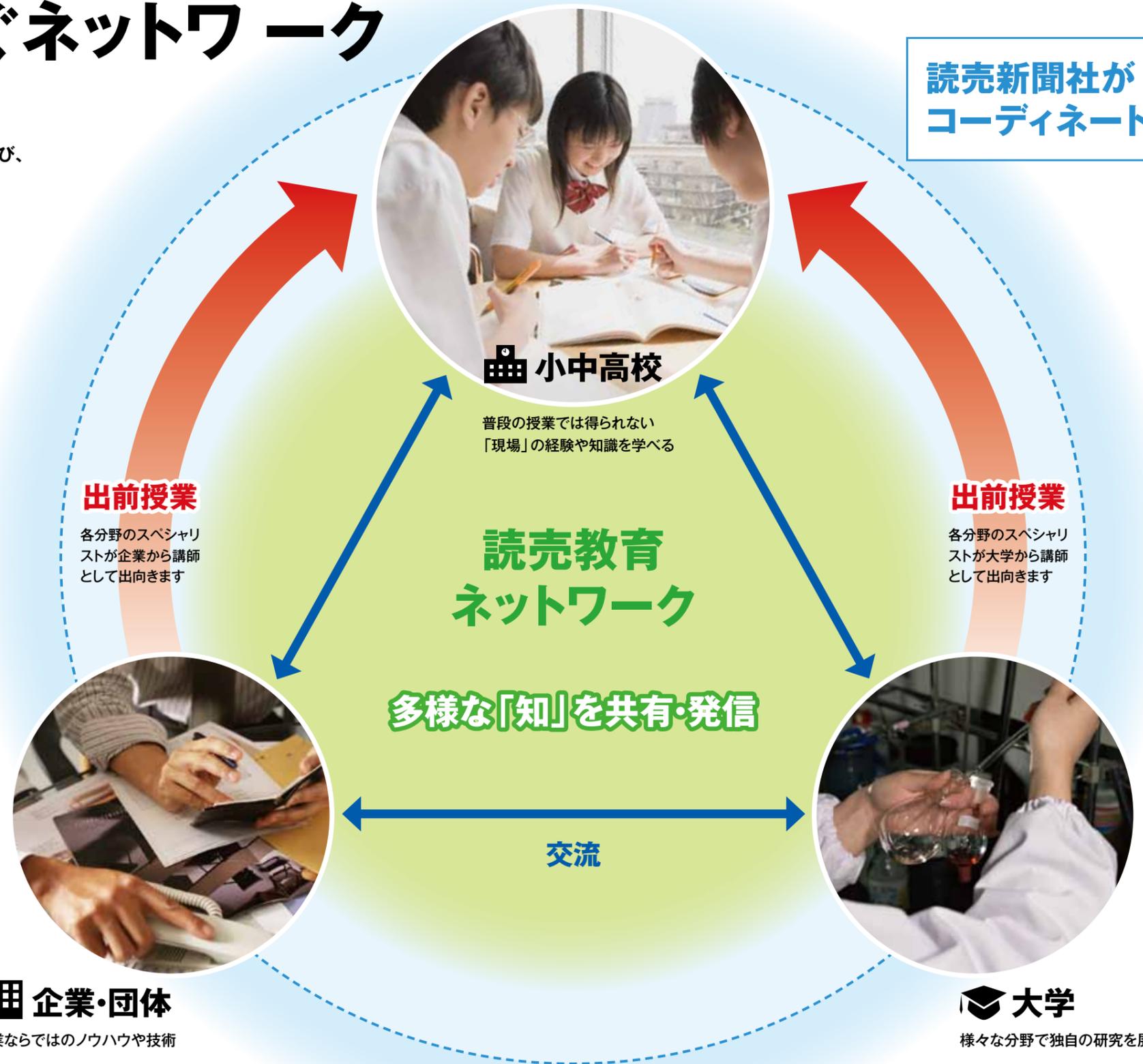
記者が千葉大教育学部の学生らと学校に出向き、記事の書き方、インタビューの仕方などを教えます。

読売ワークシート通信

最新記事を使った小中高校生向けワークシートを毎週水曜日に無料配信しています。

キャンパス・スコープ

大学生が作る日本最大級の学生新聞「キャンパス・スコープ」の制作を援助しています。



会報を発行

ユニークな出前授業や教育に関する先駆的な試みを発信します。学校、大学、企業で「学び」のあり方をさぐります。

ウェブサイト

読売新聞のウェブサイトを活用し、教育コンテンツを紹介。大学や企業のコーナーでは告知や募集記事を掲載します。

新聞で紹介

企業・団体、大学、小中高等学校それぞれのユニークな取り組みなど、ネットワーク内の活動を随時紙面で取り上げます。

イベント

各界のトップランナーを招きます。2014年10月11日には、子どもたちを招いた創立記念イベント「学び発見フォーラム」を開催します。

ICT 立体分析もおまかせ



画面に映る立体図形を見ながら積み木を組み立てる児童たち

Case Study 1
NOW

立命館小学校×タブレット

タブレット端末や電子黒板などの情報通信技術（ICT）機器が教育現場に広がっている。写真を撮影してその場で資料に取り込んだり、画面上で図形を分割して見せたり、デジタルの特徴を生かした新しい学びの方法が生み出されつつある。

英語「日本語の説明（5up）やる気・関心を喚起」

「Let me introduce my friend, Ai. She lives in Kyoto. (アイを紹介します。京都在住の子です)」

立命館小学校（京都市）で5月中旬に行われた5年生の英語の授業。児童が1人ずつ前に出て、電子黒板に映し出された級友の顔写真や住んでいる場所、得意な楽器、好きな食べ物などの画像などを見ながら、英語で紹介していく。色とりどりのこの資料、実は児童が自分でタブレット端末のパワーポイント（発表用資料作成ソフト）を使って作成したものだ。

田邊桃萌さん（11）は「写真や絵を組み合わせるの、ゲームみたい。タブレットの使い方友達と教え合えるのも楽しい」と話す。

教師は英語のみで授業を進めるため、画像を使うことで、「日本語の説明を介さず児童の理解を助けられ、関心とやる気を喚起できる」と、三ツ木由佳教諭。「子どもにとってICTは今や文房具の一つ。将来、どんな仕事に就いても必要になるので、今から習熟させたい。」

難解な分割、回転直感でわかる

算数の授業では、積み木を一定の規則で積み上げて作った立体の写真を示し、内部の様子を考えさせた上で、実物の積み木を同じように組み立てさせた。最初は苦労していた児童も、端末上で立体を動かす、一段ずつ分解してみせると、すぐに組み立てられるように。

六車陽一教諭は「立体を画面上で分割したり、回転させたりすると、イメージをつかみやすく、直感的に理解できるようにする」と話す。

同校がタブレットを本格的に導入したのは昨年11月。当時の4、5年生全員が1人1台、241台を購入し、現在は社会、理科などでも活用している。

浮田恭子校長は「ICT機器は、学びを補完し、深めるのに役立つツール。1人1台あれば、個別に物事を追究できる」と話す。

ICT機器の導入は各地で進んでいる。佐賀県では県立高校全36校で、今春入学した生徒からパソコン端末の所持を義務付けた。東京都では、荒川区が今年度中に区立小学校全34校に計約9500台のタブレット端末を配備する予定だ。

活用法は無限 効果的なポイント探ろう

ICT機器は導入後にどう活用するかが重要だ。体育で逆上がりやダンスを撮影して自分の動きを確認したり、図版や画像を拡大・書き込みをしながら議論したりと、様々な工夫が考えられる。

放送大学教育支援センターの中川一史教授（メディア教育・情報教育）は導入後の活用方法について、「ICTを授業のどこで使うかの選択が重要。児童生徒の意欲や関心を高める、思考を深めるなどねらいをはっきりさせ、効果的なポイントを探求してほしい」と指摘している。

米国内門大学の講義を聴講し、英語で新しいことを学ぶ。国際的な人材の育成をめざして、中高一貫の進学校、私立市川学園市川中学校・高等学校（千葉県市川市）では、高校1・2年生を対象に実践的な授業が始まっている。

ハーバード講義 英語で聴き、探究

パソコンルームで始まった海外帰国生向けの「英語表現」の授業をのぞくと、約20人が画面に向かっていた。インターネット経由の動画は、米ハーバード大のマイケル・サンデル教授の講義「正義論」。数百人の大学生を前に、教授は熱っぽくベンサムやJ・S・ミル、J・ロックの哲学を説く。もちろんすべて英語だ。高校生たちは画面に流れる英文字幕を参考に、リスニング力を磨く。

授業後は、教授が提示した問いへの賛否やその理由を英語のレポートにまとめ、担当教員に電子メールで提出する。授業は1学期で10回程度。ハーバード大の講座は12週24章なので、授業中に終わらない部分はある。レポート執筆もあり高校生にとっては

なりハードだが、生徒は面白いと言って積極的に取り組んでいるそうだ。最終試験に合格すればサンデル教授がサインした修了証が与えられる。濃密な学習で「読む、書く、話す、聞く」すべての英語力の底上げを図る。

米大学生の議論 大きな刺激に

画面上で果敢に質問する米国の大学生の姿は、生徒にとって大きな刺激だ。1年の安藤実さん（15）は、「皆、話術が巧みだ。言葉が豊富で表現も豊か。私も表現力をつけるため、動画に出てきた知らない単語はメモして、調べるようにしている」。同じ1年の片岡拓巳さん（15）は「学生たちは考え方が合理的。将来、世界と関わる仕事に就きたいので、自分の考えを持つことの大切さを知った」。英語に加え、「受験向けではない、大学のような探究型の学問に触れさせたい」（宮崎章校長）という目標は、実現しつつあるようだ。

2012年から動画を配信するエデックスは、ハーバード大などが世界の学生に講義を無償提供するため設立した。

一方通行のビデオ講義ではなく、ウェブ上の掲示板と連動し、受講した感想を書き込んだり、議論したりでき、試験や修了証の発行もする双方向型のシステム。こうした講座はMOOC（ムーク）大規模公開オンライン講座）と呼ばれる、インターネットを通じて空間や時間、経済的条件を超えてあらゆる人に学ぶ機会を提供する試みだ。

講義選びが力か 教員は情報収集を

この動きに着目した宮崎校長は、希望者による昨秋からの試験の実施を経て、今年度正式な授業として発足させた。MOOCを取り入れる上で重要なポイントは講義選びという。生徒たちが英語で理解でき、無理なく学べるのはどんな講義か。的確な選択には教員側の情報収集が欠かせない。「こうした先端教育が広がれば、学校間で成果や課題を共有し、互いに刺激し、磨き合うことができる。読売教育ネットワークがそんな情報交換のきっかけになれば」。21世紀型の教育の普及へ、ネットワークが果たす役割に期待を寄せる。

ネットで結ぶ 世界と学ぶ



米大学の最先端の講義をネット視聴する生徒たち

Case Study 2
NOW

市川中学校・高等学校×MOOC

読売教育ネットワーク創設記念イベント

「学び発見フォーラム」開催



当ネットワークの創設を記念して、小学校高学年から中学生とその親を対象としたイベント「学び発見フォーラム」を今秋、東京・大手町のよみうり大手町ホールで開催します。定員は500人。困難を乗り越えて夢を実現したアスリート為末さんの講演や、最先端の科学実験に参加できる東京大学の公開授業などをお届けする予定です。



【日時】2014年10月11日(土) 14:00～

【会場】よみうり大手町ホール

(読売新聞東京本社内)

【問い合わせ】読売新聞学事支援部

03-6739-6985(平日9:30～17:30)

読売新聞東京本社アクセス

住所:東京都千代田区大手町1-7-1

最寄り駅:東京メトロ

(千代田線、丸ノ内線、東西線、半蔵門線)

都営地下鉄(三田線)

「大手町駅」C3出口直結



読売教育ネットワーク 参加募集

企業・団体、大学、小中高校、個人(教職員、司書など)の参加を募集します。

読売学びサポート (<http://y-manabi.jp>) から登録してください。

読売学びサポート

検索